

一、次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。(本文には一部改めたところがある)

① 自己決定を尊重する社会が機能不全に陥る第一の理由として、社会の過剰な反応があげられます。個々人の決定を尊重するといっても、それで、個人の集合により構成される社会が失われるわけではありません。人間社会は人類が存続するかぎり続いていきます。かりに個々人が無秩序に何でも自由に決められるようになると、社会や他人に害をなす決断を下す可能性もあります。だからこそ、決定の自由には一定の制約が設けられています。放っておくと人びとは社会や他者を脅かす決定をすることもかもしれません。だからこそ、私たちは、法律やキルン^(a)を基盤とした「責任の体系」をつくり、その社会に属するメンバーの行為をあらかじめ統制しようとしています。意地の悪い言い方をすると、罰則をちらつかせながら、ある決定をすることを思いとどまらせます。しかし、個々人の自由な決定を社会のリスクと捉え、責任の体系を嚴重に整備してしまうと、私たちの社会は息苦しくなります。②を求める社会では、自分で決められないストレスが高まるばかりか、監視社会のような息苦しさも生み出されます。このような傾向は、個々人の自由な決定を不確定なリスクと捉える社会に、より強く見られます。日本社会にもその傾向はあります。

もうひとつの社会の過剰反応として、経路・手段の整備があげられます。自己決定の不確実性を恐れるのは、個々人の決定を受け止める社会だけではありません。決定を下す個人も、不確実性を恐れます。自分で決めたことを、思惑どおりに成しとげられるとはかぎらないからです。ゆえに、自己決定を尊重する社会では、個人の恐れに対応できるよう、先回りして安全な道を用意します。自己決定を迫られる私たちは、進路、趣味、なりたい自分など、さまざまなものを決めます。しかし、何かを実践することで必ずしもよい結果をおさめられるとはかぎりません。世のなかには、そうした不確実性を軽減する経路や手段が多数用意されています。資本主義の社会では、ニーズのあるところに多様な製品やサービスが生まれます。自らが行く先を決めなければならない社会で、望む目標に到達できるかわからなければ、私たちはそうしたリスクを軽減してくれるであろう製品やサービスを喜んで購入するでしょう。(中略) そうした経路が人をがんじがらめにして、却って個々人の自由な決定を阻害してしまう。これも、決定を尊重する社会の過剰な反応のひとつと言えるでしょう。

自己決定を尊重する社会が機能不全に陥る第二の理由は、個人によるものです。すなわち、「個人の決定を尊重しよう」と意識しすぎるあまりに発生する機能不全です。

個人の決定を尊重する社会では、その意識が高じてしまうと、自身の決定には立ち入らせない、他者の決定には立ち入らない、という姿勢が際立ってきます。孤独・孤立など、私たちはときに自らにとつてマイナスの決断をすることがあります。自己決定を尊重する社会では、そうした決断への介入は「余計なお世話」として切り捨てられてしまいます。その結果、到来するのが、無関心が善しとされる社会です。私たちは、自らがほかの人の決定に関与することも、自らの決定にほかの人が関与することも、極力避けようとしています。私は以前、「人それぞれ」という言葉をテーマに書籍を執筆しました。⑤でも「人それぞれ」と片付けがちな現代社会に焦点をあてた書籍です。この人それぞれという言葉がはやった背景にも、個人の決定を尊重する社会があります。個人の決定を尊重する社会は、たとえ誰かの考えや行為に違和感や不満があったとしても、そうしたものはなかなか表出できません。不満や反対の表明は、個々人の決定を尊重していないと見なされる可能性があるからです。そのため、異なった意見や考えに遭遇したさいには、「人それぞれ」と話を引き取って場を納めることが求められるのです。

このような社会では、個人というものが肥大化し、⑥「自分さえよければいい」「法律さえ破らなければ何をやってもいい」という考えが蔓延しやすくなります。これらはいずれも、他者に対する無関心から発生するものです。他人のことを考えていれば、「自分さえよければいい」という考えにはなかなかなりません。また、社会や周囲への関心が薄いからこそ、「法律さえ破らなければ」という考えが生まれます。「自分さえよければいい」「法律さえ破らなければいい」という言葉は、個人の決定や行為に何らかの口を挟まれたときに発せられがちです。このような社会では共通したルールやマナーの設定が難しくなります。ゆえに法などの責任の体系による、より強い統制が求められるのです。

他方でこうした社会では、人から手をさしのべられることも少なくなります。「自分さえよければ」と周囲への関心を失った社会では当然のことでしょう。こうした社会で強く問われるようになるのが、個々人の責任、すなわち「自己責任」です。

⑦責任の概念について検討したヤシユ・モンクは『自己責任の時代』という書籍で、一九八〇年代後半あたりから、責任の意味合いが変化し、自己責任が問われるようになったと指摘しています。ヤシユ・モンクによれば、責任という言葉を使うさいにもともと意識されていたのは、「自分の同胞市民を援助すべきだ」という意味での責任(『自己責任の時代』)でした。つまり、「他者を助ける個人の義務」として責任という言葉が使われていたのです。

ところが一九八〇年代あたりから、政治、哲学、社会科学の領域で、「責任」という言葉の使われ方が変わってきます。「自分で自分の面倒をみる責任」すなわち、自己責任という意味での使われ方が増えていきました。たとえば、政治の世界では、福祉的な支援を受けるためには、支援を受け取るだけの責任を伴う、といった議論が展開されるようになりました。援助に値するだけの努力を見せなければ、支援の対象にはならない、と言われるようになったのです。(中略)

ここまでを振り返ると、私たちは個々人の決定を尊重する社会を必死になって築いてきたものの、そこにはいくつかの問題があることも見えてきました。

▲ そうなると、個々人が社会や周囲に何からのマイナスをもたらす可能性も少なからず出てきます。こうした状況を管理するために、私たちの社会では、法律という「責任の体系」を整備して、個々人の行動にブレーキをかけようとしています。決定の範囲が広がり、個人が肥大化した社会では、同時にそれを統制する社会のルールも肥大化する可能性があるのです。厳罰化が指摘される日本社会では、とくにそうした傾向が見られます。

B 自らの決定が悪しき結果を招くことを恐れる私たちは、社会が用意した「安心のルート」をはみ出さないようサイシンの注意を払います。自分で決められる社会にもかかわらず、自ら進んで息の詰まるような人生に入り込んでしまう。自己決定を尊重する社会には、このような仕組みも内包されています。

C 自己決定を尊重するようになれば、当然ながら、個人の決定範囲は大きくなります。しかしながら、肥大化した個人は、他者の介入を認めず、他者あるいは社会のアンモクのルールへの無関心が生じやすくなります。

D 他方で決定を下す個人は、その後が生じた結果に対して過剰な責任を負わされます。また、自己責任を強調し、他者からの介入を否定する社会では、厳しい境遇にいる人びとも、その状況を「自らが招いた結果」と見なされ、見過ごされやすくなります。

(石田光規『自己決定の落とし穴』による)

問一 二重傍線部(a)「キハン」・(b)「ト(げられる)」・(c)「サイシン」・(d)「アンモク」を漢字に改めなさい。(楷書で大きくはつきりと書くこと)

問二 傍線部①「自己決定を尊重する社会が機能不全に陥る」とは本文全体をふまえるかどうか。最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

- ア 自己決定を尊重しようと思っても、なかなか尊重される社会にはなっていないということ。
- イ 自己決定を促されると、かえって自己決定したくない社会になっていってしまうということ。
- ウ 自分で決められると見せかけて、実際には自分では何も決められない社会であるということ。
- エ 自己決定を尊重すればするほど、逆に自己決定しづらい社会が出来上がっていくということ。

問三 空欄②に入る言葉として最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

- ア 厳罰化
- イ 効率化
- ウ 透明化
- エ 保守化

問四 傍線部③「先回りして安全な道を用意します」と同じ意味のことわざを次より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 急がば回れ
- イ 机上の空論
- ウ 転ばぬ先の杖
- エ 捕らぬ狸の皮算用

問五 傍線部④「そうしたりスクを軽減してくれるであろう製品やサービス」の具体例として適切でないものを次より一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 個人の能力向上、精神的成長、成功法則、あるいは人間関係の改善などを目的に、生き方や思考法を指南する「自己啓発本」
- イ 労働者に代わって専門業者や弁護士が会社への退職の意思を伝え、退職手続きの完了までサポートする「退職代行サービス」
- ウ キャリアアドバイザーが求職者と企業の間に入り、求人紹介から面接対策、年収交渉までサポートする「転職エージェント」
- エ 写真や年齢、職業や趣味などのプロフィールを登録することにより、恋人や結婚相手を効率的に探せる「マッチングアプリ」

問六 傍線部⑤「何でも『人それぞれ』と片付けがち」とあるが、それはなぜか。その理由を本文中より四十字以内で抜き出し、最初と最後の五字ずつを答えなさい。

問七 傍線部⑥「『自分さえよければいい』『法律さえ破らなければ何をやってもいい』という考えが蔓延しやすくなります」とあるが、それはなぜか。その理由を本文中より十五字以内で抜き出しなさい。

問八 傍線部⑦「責任の概念」はどのように変化したとヤシユ・モンクは考えているか。本文中の語句を用いて説明しなさい。

問九 本文中の形式段落 **A**、**D** を正しく並べ替えたものとして最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア **B** ↓ **A** ↓ **C** ↓ **D** イ **B** ↓ **C** ↓ **A** ↓ **D** ウ **C** ↓ **D** ↓ **B** ↓ **A** エ **C** ↓ **A** ↓ **D** ↓ **B**

二、次の文章を読んで、後の各問いに答えなさい。(本文には一部改めたところがある)

その翌朝、蒸し暑い一夜に苦しめられた私は、誰かがしきりにコンコンとドアを叩く音で目を覚ました。**A**と起き上がり、**(a)** 寝惚けのTシャツ姿のまま出ると、玄関口に立っていたのは瀧子親方だった。

「おはよう、まふみさん。いつもお願いばかりで申し訳ないけど、それじゃ行ってくるわね」

「はあ……」

寝惚け半分に曖昧な返事をして見送ったが、ドアを閉めてしばらくした後で、やっと自分が親方から何を頼まれていたか思い出した。これから親戚の法事で二日間出かけるので、私と南魚庵さんに一日ずつ工房の留守番をしてほしい、というものだった。

私は慌てて歯を磨き、疲れてひどい有り様になっている顔を洗い、あまり変わり映えはしないがもう少しましなTシャツに着替えて床に置きっぱなしの靴をつかむと、ルリニール工房へ向かった。

「すみません、遅くなって」

と言いながら扉を開けたところ、作業場の中の由良子さんが、ひどく驚愕した顔でこちらを凝視している。まるで、幽霊にでも出くわしたかのような表情だ。

「ええと、親方から頼まれたんです、今日の留守番を……」

「スマイレのバッジは？」

疑心に満ちた顔つきの由良子さんに言われて、私はハツとした。

しまった。ない。胸元のバッジがない。ズボンのポケットにも靴の中にもない。いつもはここに入れてあるはずなんだけど、もしか

して実家の床に落としてしまった？

「おかしいな、どこだろう……」

「あれだけは忘れないでほしいと言ったのに」

由良子さんは落胆した硬い表情でそう言った。その声には、この家で初めて会話を交わしたときのような緊張と怯えすら感じられた。私の背中からは冷や汗がにじみ出て、べったりと下着に纏わりついて不快な感触を残した。

その日の午前中、由良子さんはぎこちない雰囲気の中で仕事を続けていた。だがとうとう、正午をわずかに過ぎた頃になると、「少し、横になって休みます」

と冴えない顔色で言い出した。この暑さの中、相変わらず首元のきついチョーカーは嵌められたままである。

「具合が悪いんですか？」

「この暑さが少々、体に堪えたのだと思います」

「じゃあ、何かさっぱりしたもので……」

「要りません。どうにも食欲がないのです」

そう言って、彼女は二階の私室へ上がってしまった。

(中略)

そこへ、玄関の扉をコンコン、と叩く音がする。私は気を取り直して立ち上がった。扉を開けるとその前に立っていたのは、見覚えのある一年一組の双子だった。

「こんにちは。あっ、司書さん！」

タクトが朗らかな声で言う。夏の眩しい日差しが彼の顔を照らし、ハルトの顔にはその影がかかっていた。

「あのね、君たち、ここは本をつくるお店なのだけど、何かご用ですか？」

「えっと、なつやすみのしゅくだいで、じゅうけんきゆうというものがあります。一ねん三くみのリサちゃんショウタクくんが、ユルルルこうぼうというところで本をつくってるよ、とおしえてくれたので、ぼくたちは本がすきなので、おはなしをきいてみたいとおもいました。よろしくおねがいます」

言い終わると、タクトは勢いよくペコリと頭を下げた。それを見てハルトもつられるように、ぎこちなく一礼をする。

「せっかく来てくれたところ申し訳ないけど、今、製本家の先生は二人ともお休みなの」

笑顔だった少年は、それを聞くとにわかにながかりした様子を見せた。

「えー……。司書さんは、本をつくらないの？」

「私はただのお留守番」

「おみせのなかは、みられないの？」

「それは見せてあげてもいいけど……」

「みせて！」

少年の目はきらきら輝いており、扉の隙間から垣間見える工房の内部に興味津々の様子だった。私はチラリと上目遣いをしながら、二階で休んでいる由良子さんのことを考えた。

「いいわ。一つだけお約束してくれるかな？ 図書室と同じで、工房の中ではお静かに」

「うん。しずかにしようね、ハルト」

タクトはB声でハルトに囁き、二人は向かい合って人差し指を口元に当て「シイーツ」というポーズをした。

作業場の中へ二人を通すと、少年たちは口をポカンと開けて、初めて目にする製本工房への驚きに飲み込まれていた。

「これが本をつくるばしょなの？ ぼくはもつと、工場みたいなところだとおもってた」

「機械で本を作る工場もあるけれど、ルリユール工房では先生が一冊一冊、手作業で本を作っているのよ」

「ふうん、すごいや。ねえ、このそうちはなんですか？」

「これは『かがり台』といって、本を針と糸で縫い合わせるための……」

「あ、ちよつとタイム。十びようだけまっってください」

とタクトは私の話を制止し、そして「じゅう、きゅう、はち、なな……」とつぶやきながらゴソゴソとリュックの中を探り、ノートと鉛筆を取り出して熱心にメモし始めた。紙のこと、表紙のこと、綴じ方のこと……。

「しつもんがあります。いっさつの本をつくるのに、なんじかんくらいかかるのですか」

「この工房では、お客さんからいろいろ難しい注文を受けることが多いし、先生はとてもこだわって一冊の本を作るの。だから、少なくとも一か月。数か月や、一年近くかかることも」

「いちねん……」

タクトは目を丸くして驚いている。

「その、一ねんかかる本は、その一ねんのあいだ、先生はまいにち、本をつくっているのですか？」

① につこりとうなずきながら、私はかつて自分が全く同じように、瀧子親方の前で驚いた日のことを思い出した。あの時は、一冊の本に何か月も、まして一年もかかるといふことが想像もつかなかった。けれども今では、少しずつ理解し始めている。製本とは日々の地道な、気の遠くなるような作業の積み重ねであり、製本家の誠実さと忍耐によって作られるものだというところを。

「すごいなあ。ぼくもいつか、本をつくってみたいな。じぶんで本をつくれるなんて、まほうみたいだ」

タクトが興奮している脇でハルトはずつと口をつぐみ、製本の機械や道具にも、美しいモロッコ革にも、マーブル紙にも興味を示す

様子はなかった。

その代わり、彼は妙なものに目を留めていた。長方形の穴の開いたボール紙である。ハルトはそれを手に取って、片目をつぶったり、ボール紙を顔に近づけたり遠ざけたりしながら、四角い穴の向こうに見える景色を熱心にみつめていた。

「それはね、『窓あき文庫』用の厚紙。このおばあちゃん先生が考えたアイデアなの。こうやって、古い本の上に乗せると……。ほら、新しい表紙ができて、窓から本のタイトルだけが見えるでしょう？」

「あ、ほんとだ、おもしろいね」

すると、ハルトは急にしよつていたリュックを下ろし、中からCと一冊の絵本を取り出した。それはあの、『とべない鳥のしょくん!』だった。彼はページを開き、文章の印刷された上に窓の穴の開いたボール紙を置く。

「ねえ、ハルト、なにしてるのさ？」

彼はじつとそのボール紙の窓を凝視している。そして、ページの上に乗せた厚紙の位置を少しずつずらしながら、ハルトは絵本を読み上げた。

「——あるところに、三羽のなかのいいとりたちがいました。あひるのガアブと、だちようのディーディー、それにペンギンのポンポんです。ふつう、とりというのは、そらをじゆうにとびまわります。ツバメだって、カラスだって、アホウドリだって。でも、この三羽のとりたちは、りっぱなつばさがあるのに、ちっともとぶことができませんでした」

訥々とした棒読みながら正しく文章を読み上げている。驚いた。まるで別人のようだ。

「すごいすごい、ハルト、やればできるじゃん」

興奮気味に手を叩きながらタクトが言う。

「あ、これって、榊先生が言っていた……」

相談室で榊先生に教えられた「ディスレクシア」という識字障害のことを思い出した。反転した文字、滲みながら重なる文字、歪んで踊り出す文字……。余計な文字を隠せば読めるようになる子もいるし、そのための補助器具もあると榊先生は言っていた。もしかしたら窓あき文庫の「窓」が、ちょうどその役目を果たしてくれるのだろうか？

「ぼく、これが、ほしいんだけど……」

窓あき文庫のボール紙を手にしたハルトが、Dとした口調でこちらを窺う。

「字をかくせば、ハルトの本はダンスしなくなるの。でも、おかあさんについても、しんじてくれない。文字がうごくわけないし、ハルトはふざけてないで、もつとまじめにべんきようしなさいっていう。

ウンじゃないよ。ハルト、ふざけてなんかないよ。ぼくしってるもん。ねえ、司書さんは、ハルトのことしんじてくれるよね？」

「ええ……」

「これがあつたら、ハルトが本をよむのにやくにたつとおもう。ぼくたち、どくしょかんそう文をかかなきやいけないんです。おねがい、司書さん」

タクトは黒い粒のような瞳で私の顔をじつとみつめた。

「あのね、これは製本家の先生が作ってるものだから、君たちにあげてもいいですかって、ちよつと先生に聞いてくるね」

二階へ上がり、ベッドで休んでいた由良子さんに事の次第を説明し始めた。ただでさえ彼女が不機嫌で体調が悪いところへやこしい話するのはあまり気が進まなかったのだが、由良子さんは嫌な顔をするどころか、神妙な顔つきで聞き入っている。驚いたのは、私が「ディスレクシア……という名前の障害があるそうぞ」と言うと、「知っています」と当然のように答えたことだった。

「では、この窓あき文庫のボール紙、ハルト君にあげてもいいでしょうか」

「いいえ、駄目です」

「どうして？」

「この窓では不十分だからです。中途半端に文字が切れたり、余計なものが見えたりしてしまうのは、かえってよくありません。どんな本でもびつたり一行が表示できるように、窓の幅と高さは調節可能にすべきです。今から作りましょう」

「えっ、でも由良子さん、体調が……」

「このくらいなら起きられます、大したことはありません。……子どもは苦手なので、直接会うのだけは勘弁して頂きたいのですが」そこで彼女は一階の工房へ降りるやいなや、子どもたちの眼差しを避けるように間仕切りの向こうへ駆け込んだ。

「製本家の先生が、もつと立派なものに作り直してくれるんですって。それまで、いい子で待っていてくれるかな？」

「はい」「はい」

タクトとハルトの二人は客用の席に椅子を二つ並べて座り、テーブルの上にノートを広げて、さっきの聞き取り調査の「まとめ」を書き始めた。どうやらこの名前を「ユリールこうぼう」だと二人とも勘違いしている様子なので、「ルリール工房」だと教えてやると「……うわあ」とタクトは小声で叫び、ノートのあちこちにゴシゴシと消しゴムをかけた。

そんな風に、一時間ばかり過ぎた頃だろうか。

コンコン、と間仕切りを叩く音がしたかと思うと、扉下のフラップが開いてコトンと何かが差し出された。完成した窓あきの装置だった。

窓の周りには可動式の枠があり、それを動かすと高さや幅を自由に調整することができる。その他には一切余分なものがなく、窓の中央だけに集中できるデザインになっている。ただ一つだけ、裏側の下部にはこんな文字が記されていた。

——これは世界の覗き窓

「わあ、すごい。まどが、タテにも、ヨコにもひろがるよ。ハルト、よかつたね。せいほんかの先生、どうもありがとう」

「……ありがとう」

すると間仕切りの向こう側から、

「あ、はい……あの……」

というたどたどしい返事が聞こえた。数秒の間を置いて、間仕切りの扉がゆっくり開かれたかと思うと、その陰から由良子さんがおずおずと姿を現した。一瞬だけ双子のほうを見たがすぐに目をそらし、俯いたまま、

「……どういたしましたか？」

と、聞こえるか聞こえないくらいの小声でつぶやいた。子どもたちが何か言ったり駆け寄ったりする暇もないくらい、すぐさま逃げるように二階へ戻ってしまったのだが、たった一言にせよ、由良子さんが初対面の人間に面と向かって口をきいたのを私は初めて目の当たりにした。

「ねえハルト。もういつペン、』とべない鳥のしよくん！』よんでみて」「うん」

そこでハルトは再びリュックの中から絵本を取り出し、開いたページの上に「③」を載せて幅と高さを調節すると、窓から見える文字を順番に読み上げた。

「——『そんなら、しみんプールへいこうよ』と、ペンギンのポンポンはいいました。『あきやふゆになると、だれもプールでおよくひとはいないんだ。だから、そこでありつたけ、とぶれんしゆうをしようよ。あそこなら、だれもぼくらのことをわらわない。とべないとりでも、できそこないだなんていわれない。それにぼくらは、このまちの、れつきとしたしみんだからね……』」

(坂本葵『その本はまだルリユールされていない』による)

問一 二重傍線部(a)「寝間着」・(b)「堪(えた)」・(c)「朗(らか)」・(d)「垣間見(える)」をひらがなに改めなさい。

問二 空欄AとDに入る言葉として最も適切なものを次よりそれぞれ選び、記号で答えなさい。(記号は一度しか使えない)

ア ひそひそ イ にこにこ ウ ふらふら エ ごそごそ オ おずおず

問三 傍線部①「にっこりとうなずきながら、私はかつて自分が全く同じように、瀧子親方の前で驚いた日のことを思い出した」とあるが、この時の心情として最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

ア 以前の自分と同じように出来上がるまでの長さに驚いているタクトに微笑ましさを感じている。
 イ いくら何でも同じ作業を毎日しているわけではないかとおかしさを禁じえないでいる。
 ウ すべての本が完成まで一年かかるわけでもないのに勘違いしているタクトに幼さを感じている。
 エ タクトの好奇心に圧倒されて、もつと多くのことを伝えたいとどこかしら気持ちを抱いている。

問四 傍線部アとオの「ない」のうち、形容詞の「ない」を全て選び、記号で答えなさい。

問五 傍線部②「逃げるように二階へ戻ってしまった」とあるが、それはなぜか。その理由を本文中より十字以内で抜き出しなさい。

問六 空欄③に入る言葉を本文中より六字で抜き出しなさい。

問七 この作品の特徴を説明したものととして適切でないものを次より一つ選び、記号で答えなさい。

ア タクトとハルトの兄弟の動きや様子をしっかりと描き分けることで、二人の関係性を明確にしている。
 イ 子ども達のぎこちない会話をひらがな主体で表現することでそのあどけなさを強調しようとしている。
 ウ 直喩や隠喩を多用することで日常的でない難しい事態をできるだけわかりやすく伝えようとしている。
 エ 細かいところまで丁寧に描き切ること、繰り返しられることの繊細さを鮮明に伝えようとしている。

問八 次の文章は、作品後半部の引用で、由良子さんに関する事実が明かされる場面である。この引用内の空欄に入る言葉を本文中より五字以上十字以内で抜き出しなさい。

「彼女は——相貌失認を患っているんです」

「そうぼう……しつにん……？」

耳慣れないその言葉を、私はただどしく聞き返した。

「つまり、人の顔の区別がつかないんです。目の前にいる他人が誰なのか、知り合いなのか、それとも見知らぬ人間なのかもわからない」(中略)

「じゃあ、由良子さんは、私の顔を覚えていないと？」

「そういうことです」

「でも、由良子さんとは毎日顔を合わせて、普通に挨拶したり、会話をしたり……」

「あなたはそういうつもりかもしれないが、彼女はそんな風に認識していませんよ。彼女が見ているのはあなたの顔ではなく、服装や髪型、背恰好……それに、何よりもです」

《問題は次のページに続く》

三、次の古文を読んで、後の各問いに答えなさい。

近ごろ、最勝光院に梅盛りなる春、^{(a)*2}ゆゑづきたる女房一人、^{*3}釣殿の辺にたたずみて、花を見るほどに、男法師などうちむれて入り来ければ、こちなしとや思ひけむ、⁽¹⁾帰り出でけるを、着たる薄衣の、ことのほかに黄ばみ、すすけたるを笑ひて、

花を見捨てて帰る猿丸^{(2)*4}

と連歌をしかけたりければ、^{(b)*5}とりあへず、

星まぼる犬の吠えるに驚きて^{(3)*6}

と付けたりけり。⁽⁴⁾人々恥ぢて、逃げにけり。

この女房は俊成卿の女とて、^{*8}いみじき歌よみなりけるが、深く姿をやつしたりけるとぞ。

(注)

- *1 最勝光院 Ⅱ かつて京都にあった寺。
- *2 ゆゑづきたる女房 Ⅱ 上品な雰囲気のある女房
- *3 釣殿 Ⅱ 寝殿造の南端にある建物。
- *4 連歌 Ⅱ 上の句(五・七・五)と下の句(七・七)を別の人がよむ形式の詩歌。
- *5 とりあへず Ⅱ すぐさま
- *6 まぼる Ⅱ 見つめる。「星まぼる犬」は当時のことわざで、卑しい者が及ばぬ高望みを抱く意。
- *7 俊成卿 Ⅱ 歌人である藤原俊成のこと。
- *8 いみじき Ⅱ すばらしい
- *9 やつす Ⅱ みすばらしくする

問一 二重傍線部(a)「ゆゑ」・(b)「とりあへず」を全て平仮名・現代仮名遣いに改めなさい。

問二 傍線部①「帰り出でける」とあるが、その理由として最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

- ア 自分のすすけた服装を男法師たちに見られるのは恥ずかしいと感じたから。
- イ みすばらしい姿の自分では、男法師たちの花見の邪魔になると感じたから。
- ウ あまりに無粋な男法師たちに、せっかくの梅見を邪魔されたと感じたから。
- エ 花見の席に犬を連れてくるような騒がしい男たちを避けたいと感じたから。

問三 傍線部②「猿丸」・③「星まぼる犬」とは誰のことを指しているか。本文中よりそれぞれ抜き出しなさい。

問四 傍線部④「人々恥ぢて、逃げにけり」とあるが、その理由として最も適切なものを次より選び、記号で答えなさい。

- ア 夜遅い時間に急に犬が吠えたので驚いたから。
- イ 侮っていた相手の返しが予想外で驚いたから。
- ウ 犬猿の仲である俊成卿の女だと気づいたから。
- エ 梅だけを見て星の美しさに気づかなかったから。

問五 本文の出典である『十訓抄』は、鎌倉時代に成立したとされる説話集である。同じジャンルの作品を次より選び、記号で答えなさい。

- ア 枕草子
- イ 源氏物語
- ウ 奥の細道
- エ 宇治拾遺物語